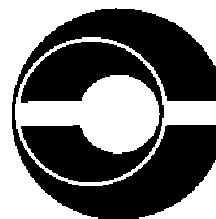


カナダ日本語教育振興会

Newsletter No. 32

Canadian Association for Japanese Language Education

ホームページ : <http://www.cajle.org>

June 22, 2006

巻頭言

古典は声で届けよう

楊 暁捷

前回、この欄目で「ポットキャスティング」のことを書いた。それからの半年、ほぼ一日も欠かさずにインターネットから取り込んだ音声内容を楽しんできた。名作や文芸番組もあれば、その日その日のニュースもあった。そしてこのような時間が続く中で、自分からもなんらかの発信をしてみなくてはとの衝動に駆られた。わたしの研究分野は日本の古典である。「ポットキャスティング」で定期的になにかを公表することはとても無理だが、小さな規模の内容をまとめて作ってみることなら、それなりに可能だ。今回はそのささやかな試みの結果や、それに至るまでの考えを記してみる。

とりあげるタイトルは『後三年合戦絵詞』という鎌倉時代に作成された絵巻である。現在は東京国立美術館に保存され、重要文化財に指定されているこの作品は、日本中世の絵巻物の基準作だとされている。絵巻に描かれたのは、十一世紀の終わり頃、東北の地で繰り広げられた中央の武士源義家と地方の覇者清原家衡・武衡との間の合戦だった。そこに語られたストーリーの数々は、平安時代の武士たちのあり方を語るうえで、由緒ただしいエピソードとして頻りに引用されて、広く知られている。一方で、私はストーリーを伝える絵の役割や表現の方法を考えるという課題をもって、過去数年の時間をかけてこれを読み続けてきた。これを対象に音声表現を試

———— 目次 ————

◆巻頭言	
古典は声で届けよう.....楊暁捷	1
◆年次大会	
2006年度年次大会準備報告.....谷原公男	3
◆会員通信	
理事十八年を振り返って.....鈴木美知子	4
CAJLEと私.....中尾良子	5
世代交代.....金谷武洋	6
ありがとうございました.....宇田川洋子	7
◆特別寄稿	
「視聴覚」の授業とは何かと.....広瀬研也	8
◆連載	
短歌に詠まれた日本語教育の現場.....鶴沢梢	11
日本事情・・運動会？水泳？.....王伸子	14
◆活動報告	
活動報告とこれからの活動案内	
.....清水道子・鈴木美知子、他	16
BULLETIN BOARD.....王伸子	19
編集部便り.....	20

みるということは、作品へのもう一つのアプローチになることは言うまでもない。

一点の絵巻の作品に音声を加えるということは、古典研究という立場からすればいくつかの理由が挙げられ、とりわけ古典の基本に関わる次の二点が大事だと思う。一つ目は、絵巻というジャンルは、昔から絵と音声との競演によるものだった。絵巻の絵を見ながら、そこに添えられる文字テキストを誰かに読ませてストーリーを楽しむということは、平安や鎌倉時代の日記資料などに多く記され、ひいては絵巻の中のユニークな場面として描かれていた。貴重な作品を借りるなどして手に入ったら、尊敬のおける文人に頼んで読み上げてもらい、その傍らで絵の鑑賞に耽るという公家貴紳たちの姿を思い浮かべて、絵巻とは今日におけるテレビか映画のような物だったと言えよう。二つ目の理由は古典全体に及ぶ。日本古典文学の中心となるものが「物語」だったことが象徴しているように、もの（ストーリー）を語るということは、つねに文学活動の中心だった。かつては音声によって伝達されていた内容は、記録方法の制限により、今日のわれわれには文字に記されたものを目で読むという方法しか接することができない。だが、消えてしまった音声そのものを聞く可能性を持たない今日になっても、ストーリーを耳で楽しむということを追体験することは、あっていいように思われる。

一方では、上記の二つの理由はそのまま二つのチャレンジとなる。二番目の伝達の手段としての音声から言えば、かつて行われていた文学享受の体験を

思い起こさせるためには、はたして自分の声でいいのだろうか。発音のありかたから表現の能力にいたるまで、その落差はあまりにも大きい。そして一番目の、絵と文字との競演だが、テレビや映画を連想して、享受の在りようを思い描くにしても、完全な答えがそこにあるわけではない。絵巻とは今日のマンガにあたるのであれば、それをアニメ、さらに俳優実演の映画に仕立てるためには、いくつか質的な飛躍があって、安易に短絡させては重要な要素を見失う危険に直面してしまう。言うまでもなく、私は以上の難題に答えられるといった大それた自信もっているわけではない。それどころか、文字テキストの空白をどう埋めていくかといった初歩的な作業から、すでにしどろもどろに苦労しはじめたものだった。たとえば「今日」という二文字でも、はたして「けふ」なのか、はたまた「こんにち」なのだろうか、音声に直してみないと気づかない課題は山積みだ。結局私にできることはただ一つ。丁寧に、知りうる限りの方法をもって考証を重ね、自分なりの一つの音声バージョンを試作して、可能な答えの一つを提供してみるのみだ。

絵巻『後三年合戦絵詞』の文字テキストは、計十五段、約八千文字に及ぶ。いまは原文と全文の現代語訳の両方合わせて約七十分の朗読をすべてインターネットに載せた。サイトのタイトルは、「音読・後三年合戦絵詞」。お暇な折にどうぞ一度アクセスなさってください。ご意見やご提案をお寄せくださることを心より楽しみにしている。

(<http://www.ucalgary.ca/~xyang/go3nen.html>)

年次大会

2006 年度年次大会準備報告

CAJLE2006 大会委員長 谷原 公男

2006 年度年次大会は 8 月 25 日(金)から 28 日(月)までの 4 日間、国際交流基金の援助を得て、トロント新移住者協会日本語プロジェクトとの協賛で、国際交流基金トロント日本文化センターにて開催します(4 日目の日帰り旅行を含む)。

今大会はテーマを「日本語教育と生きた日本語」とし、学習者の関心・興味、学習動機を持続させるために、教科書ではなかなか扱えないポップカルチャーなども含めた生の日本語をどの程度どのように扱うべきかを皆さんと一っしょに考える機会としたいと思います。また、そのような実践的日本語教育を有効にするための基礎固めの機会も設けました。

25 日、26 日の午前は、毎年恒例となりました研究論文発表を行います。今年もカナダのみならず日本やアメリカから多数の応募があり、選抜された 26 名が、日本語学、日本語教育、第二言語教育、継承語教育の分野における理論的考察や実践報告、教材開発などのオリジナリティあふれる研究発表論文を行います。

26 日午後(予定)には、大会テーマのもと、ヨーク大学の太田徳夫氏をお迎えし、基調講演を行っていただきます。カナダでの長い教授経験からいろいろと興味深いお話をしていただく予定です。ご期待

ください。25 日午後と 27 日には、日本語教師のためのセミナーおよびワークショップを行います。講師には、まず上野善道氏(東京大学)をお迎えし、日本語教師として知っておくべき音声・音韻の基礎についてお話しいたします。上野氏は、現在日本語学会の会長も務めておられ、日本語教育の会でお話を伺える貴重な機会です。また、有馬淳一氏(国際交流基金日本語国際センター)が基金開発の教材等を指導の実際に焦点を当ててご紹介くださいます。室屋春光氏(アルバータ教育省、国際交流基金派遣)には、IT を利用した生きた日本語の指導法について実践的なワークショップを開いていただく予定です。

28 日は日帰り旅行を企画中です。前回のトロント大会の際に大変好評だったナイアガラ瀑布とナイアガラ・オン・ザ・レイクに引き続き、今回はムスコカ湖への旅を計画中です。

詳細は、ホームページに近日掲載の予定です(<http://www.cajle.org>)。また、会員の皆様に近日郵送予定の大会案内およびプログラムをご覧ください。

今年も皆様の活発な参加をもとに有意義な会にしたいと大会準備委員一同張り切っております。皆様ふるってご参加ください。

会員通信

理事十八年を振り返って

鈴木 美知子

この度、理事引退に当たり来し方に思いを馳せてみれば、創立十周年を祝った日は既に遠く、第一期理事十三名中現役は自分ただ一人、ご永眠された方が三名も居られることに改めて思い至り、「なんとまあ、長い道のりを来てしまったものよ」と、いくつもの節を刻んだ歴史が見えてきて感無量の思いである。

会の活動を年少者から大学/成人教育までと広い視野で捉えながら、片や継承語教育を充実させたくても適任教師不足が大きな悩みであった現状に「自分達の手で教師を育てましょう」と継承日本語教育に心を砕いてくださったのは初代会長でした。意欲的に実施した勉強会では実にたくさんの方の事を学びました。大きな特別プロジェクト「ヘリテッジ小・中学生の会話力査定」が始まったのは1991年、翌1992年には三部会が発足し、特別プロジェクトと抱き合わせつつ活発な年少者部会活動へと繋がっていった。この結実が2000年春に出版された「子どもの会話力の見方と評価ーバイリンガル会話テスト(OBC)の開発ー」である。

総会、夏期現職日本語教師研修会、公開講演会、春期日本語セミナーと四季を通して活動が企画され、この間を縫って進める部会活動、役員会、部会会議など、いつも駆け足しているような忙しい日々だったが活気に溢れていた。

1995年、会のロゴ「渦」が決まった。8月には「日系カナダ人のためのミニ教師養成講座」が実現し、翌1996年、モントリオール大学で、「大学部会研究発表会」の一步が踏み出された。これで、やっとCAJLEの会の形が完成したと嬉しそうだった会長

の笑顔がまだ眼裏にある。この発表論文十一点は、金谷武洋大学部会担当の骨折りにより紀要と言う枠組みで纏められ、「日本語教育論文集第1号」としてモントリオール大学東アジア研究所から出版された。2号より「ジャーナルCAJLE」と改名され既に7号を数えるに至っている。

発足八年を経た1996年、夏期現職日本語教師研修会の期間に年次総会や公開講演会がまとめて実施され、翌年からは「年次大会」として現在に至っている。この大改善はそろそろ疲労が慢性化してきた事務局メンバーにとって、ほっと息の抜ける嬉しい出来事だった。

近年では2003年の年次大会が、初めて会場をカルガリー大学に移して実施され、十五年越しの念願が達成されたことに尽きる。楽しいイベントも加わり、昨年のビクトリア大学へと順調に動き出したサイクルを今後も是非継続させて欲しいものである。

着実に足跡を残し歩み続けて来た会の流れにずっと携わってこられたお陰で、すばらしい講師の方々からたくさんの方の事を学び、数え切れない程の会員との出会いに視野を広げていただいた。又、暖かく堅い理事/役員の方々の結束から受けた恩恵は感謝し尽くせない。

会長オフィスに間借りしていた事務局が、1994年初夏に開設されたNAJC事務所の地下に移転、小さなスペースではあったが自分達の城を構えた喜びは大きかった。当時、ミニバンに積んで二往復そこそこだった所帯も、十二年の歳月に随分膨れている。引退直前にこの事務局の整理と転出に出会うのも何かの因縁かもしれない。会もまた、大きな転換

点に立っていることが痛切に感じられてならない。二十一世紀の CAJLE が、教師と生徒の心、意欲(向上心)、エネルギーのぶつかりを表したと言うロゴ「渦」に込められている精神を大切に、時代の要請に

対応しつつ更なる発展をし続けることを切に祈りつつ、今後は一会員として見守っていきたい。長い間ありがとうございました。

CAJLE と私

中尾 良子

歳月の流れのなんと速いことか、1994 に CAJLE 理事に就任してから、もう 12 年、一昔以上たってしまったが、つい昨日のように思われる。CAJLE の入会はその数年前だったと思う。理事就任の頃は中島元会長を中心にトロントで殆どの振興会の企画、実務をしていた。恒例となっていた夏季現職日本語教師研修会、秋と春の勉強会と次々と催し物も多く、よく事務所に集まっては皆で企画を練ったものである。そう言えば、事務所が現在の所に移転したのも私が理事就任した頃である。あの頃はトロント理事仲間もまだ若く、新米の私も張り切って自分のノルマを果たしていた頃だ。時の流れで、NAJC から破格値の家賃で間借りしていたその事務所も、この度売却されることになり、7月3日までに立ち退かなければならなくなった。古い建物の地下であるから、決してきれいな部屋とは言えないが、思い出一杯の場所である。

私はこの 12 年を通して会計担当をしてきた。最初は杉本陽子さんの補佐、それから、2001 年から渡並美和さんと一緒に財務を任せられてきたが、お二人のお陰で、こんな私でもどうにか切り抜けてこられたと深く感謝している。会計担当は年間を通して、グラント申請、会計報告作成、会費集めなど終わりのない仕事が続く、時には疲れることもあったが、会員との接触という点では、一番身近にあった役職ではなかっただろうか。役柄、多くの方々と知り合いになり、私にとっては、CAJLE での仕事は

とてもいい経験であった。今でも目を閉じると走馬灯のように、バラエティーに富んだ多くの勉強会や講師の先生方、出席された方々の懐かしい顔が思い出される。

私は 1989 年から成人と子供に日本語を教え始めたが、振興会との関わりなしでは日本語教師としての現在の私はないと思っている。当時、アルク社の通信講座「日本語教師養成講座」が会員に特別価格で紹介され、新米日本語教師の私は早速受講した。途中で投げ出すこともなく、15 ヶ月の間、毎朝早く起きて勉強したものである。あの頃は頻繁に教師養成の勉強会が CAJLE 主催で行われていたから、教材作りなど幅広く勉強させてもらった。教材作りと言えば、1995 年だったか水谷信子先生が講師としていらっしゃった夏季研修会は思い出深い。部会別にグループを作り共同作成した教材が別の部屋一杯に、そして廊下にも所狭しと展示され、その作成者たちの活気ある発表と、それについての水谷先生のご批評やコメントは大変勉強になり、忘れられない素晴らしい大会だった。その他、振り返ればどの研修会もそれぞれに印象深く、楽しい思い出である。私は理事として会と深く関わってきたお陰で、理事の方々、日本語教育の専門の先生方との交わりが出来、他では得られない貴重な経験をさせて戴いた。わけても、トロント事務所に属する理事の面々とは姉妹のように、家族のように協力・助け合い、集まれば笑いの絶えない素晴らしいチームワーク

で会運営の実働の核となって活動できたことは、喜びでもあり励みでもあった。会を離れても末永くこの友情は消えることがないであろう。

今年ももうすぐ夏の大会がやってくる。馴染みの方々、懐かしい方々、そして、新しい方々にお会いできるのが楽しみだ。毎年、研修会には著名な先生方をお招きし、また、世界のあちこちから研究発表者を迎え、大会はいつも活気に満ち、和やかで熱気に満ちている。また、勉強後の懇親会は勿論のこと、大勢で夕食に、時にはカラオケにとくり出してお互いの交わりの時間はとても楽しい。普段は紳士淑女然たる講師の先生方や出席者の方々の以外な面をみては大いに笑い、おしゃべりしたり、みんなが一気に近づき仲良くなるものこんな時間があるからである。だから、大会最終日はいつも名残惜しく、再会を約束して別れることになる。この3、4年前から、それまでトロントでのみ開催されていた年次大会が、開催地を隔年毎にトロントと他の土地で催すようになり、2003年はカルガリー大学で、2005

年はビクトリア大学で開催された。それによって多くの地元の日本語関係者の方がたとえ交わりをもてたのは、大きな収穫であった。そして、最終日は雄大なロッキーの山々に包まれたバンフと風光明媚なビクトリアでのバスの小旅行も楽しい思い出である。

私は個人的な理由により、この夏、今期の任期を終えたら振興会の理事役員を辞めさせて戴くことになった。長年一緒にやってきた仲間と離れるのは寂しいが、これも時代の流れである。CAJLEも少しずつ時代に沿って形を変えながら、歩んでいかなければならない。新しい若い世代の方々にバトンタッチし、よりよきカナダ日本語教育振興会を作り上げて戴きたいと願っている。

後に続く方々、どうか、理事になって会を引き継いで支えていってください。私はこれから一会員としてこの会に連なり、みなさまと一緒に勉強したいと思っています。長い間、ありがとうございました。

世代交代

金谷 武洋

世代交代ということをもって理事と役員を辞すことにした。振興会には1990年から会員となり、爾来長年お世話になってきたが、理事としてはここいらが潮時と感じたからである。1994年以来、2度のモンリオール大会（ただし春の研究発表のみ）、JOURNAL CAJLEの立ち上げと5号までの発行、それから年次大会での研究発表会運営が僕の主な仕事だった。それらの一つ一つに忘れられない思い出がある。そして、手伝ってくれた、いや一緒に汗を流してくれた仲間がいる。かけがいのない真の友情を培って、そこから得られた充実感と達成感はまさに人生の宝だ。これは墓の中にまで持って行き

たい。

正直な所、ここ2年ほどは下り坂だった。それまでの様な充実感が感じられず、また僕からも与えられないという気がしたのだ。この世の全ての営為には上昇の機運があり、やがては下降へと転じるのが定めだ。高みに居続けることは出来ない。出来たとしてもそれは思い込みにすぎず、その実はマンネリやデカダンに淫することになる。ならば新たな地平を目指すまでだ。そうやって古い世代が去り、新世代に道を譲ってこそ、新たな方向性や思いも寄らぬ新機軸の導入に繋がるだろう。それを新旧交代と人は呼ぶ。

一番の思い出は？と楊編集長がご下問だが、それは恐らく僕の初仕事だという気がする。つまり1995年4月22日と23日の両日、モントリオール大学で開催した春季研究発表会だ。今でも書架にあるぶ厚いバインダーを手に入ると、その2日間の興奮が蘇ってくる。今の会員でそこに居合わせた人は多くないと思うが、とにかくハプニングの連続で、命を縮めつつ楽しさも格別の、誠に強烈な体験だった。前日にトロントから手伝いに来てくれた数人の仲間と行った中華料理の夕べのことはいまだに我々の語り種となっている。何とか無事に終了後、打ち上げパーティのワインの美味しかったこと。ジ

ャーナルの企画も実はその際に出たのだった。JOURNAL 第一号が、体裁上はモントリオール大学東アジア研究所の紀要として日の目を見たことにはそうした経緯がある。そうそう、個人的には、この時に僕が発表した「学校文法批判：主語・謙譲語・対象語」が、その7年後に講談社が出してくれた「日本語に主語はいらない」の骨子となったことも忘れられない。

今後も、振興会は一会員としてやや遠くから見守って行きたい。役目の終わった老兵は消え去るのみである。振興会の今後に大いに期待している。

(<http://blog.goo.ne.jp/shugohairanai>)

ありがとうございました

宇田川 洋子

早いもので、あっという間に三年間がたつてしまい、任期を終えて六月末には日本に帰国することになりました。思えば、2003年の夏、着任後最初の研修が、CAJLEのカルガリー大会でした。というよりも、すでに着任前から、実行委員の鶴沢先生とはメールのやり取りをしていたのですから、本当にCAJLEの2003年大会がカナダでの最初の仕事だったわけです。

カルガリー、トロント、ビクトリアと続けて研修に呼んでいただき、大変光栄に思っております。英語での研修を担当させていただきましたが、少しでもみなさんの授業にお役に立てましたら幸いです。

CAJLEの大会というと、研修だけでなく、懇親会や最終日のツアーなど、いろいろなことが楽しく思い出されます。それぞれの学会には個性がありますが、CAJLEの雰囲気はたいへん家庭的です。おそらくメンバーの皆さんの人柄が反映しているでしょう。

国際交流基金の2003年の調査結果を見ますと、

日本語学習者数において、カナダは依然世界九位です。学習者の内訳を見てみますと、初等・中等教育（いわゆるK-12レベル）が46%強、高等教育（大学、短大など）が約35%、学校教育以外（日系人対象の日本語学校、語学学校、公開講座、生涯教育など）が19%となっています。そして、この、三番目の学校教育の19%という割合は、世界の平均12.2%と比較してかなり高くなっています。カナダの日本語学習が発展してきた大きな理由は、継承言語教育などで長い間カナダの日本語教育を守ってきた方々の努力の結果によるところが大きいといえるでしょう。

最近では、小学校から高校までのバイリンガル教育などに関する研究の成果もいろいろ発表されています。それによると、二ヶ国語あるいは三ヶ国語を話せる生徒は、ごく初期の一、二年を除いたほとんどの時期で、単一言語（英語あるいはフランス語だけ）を話す生徒よりも、数学や社会科などの成績がいいことが多いということです。日本語と英語、

アラビア語と英語のようなかなりシステムの異なる言語の組み合わせでも、少なくとも、英語での各科目の学習の妨げにはならないという結果がでています。このように、言語教育に関しては肯定的な研究結果が多く見られ、それが教育政策にも反映しています。

カナダにとって日本は、依然として重要な貿易相手国です。アジア各国の経済が発展してきたとはいえ、2004年の段階で、日本の国家予算はアジアの残りの国すべての国家予算の合計を上回ると聞きました。日本の将来に否定的な日本人が少なくありませんが、カナダの人々のビジネス対象国としての重要度は当分変わらないと思います。これに、アニメやコンピューター・ゲームのようなポップカルチャー・ブームも加わって、日本語教育はもっと発展していいのではないのでしょうか。CAJLEのみなさんには、そのすばらしいチームワークとネットワークで、ぜひこれからもカナダの日本語教育発展にご尽力いただきたいと思います。

などと、えらそうなことを申しましたが、皆様三

年間本当にお世話になりました。アカデミー賞の受賞スピーチではありませんが、みなさんに心からお礼を申し上げたいと思います。Maritimeのほうで何度もお世話になった王会長、西島先生、大江先生、トロントで各種の研修や図書購入などいろいろお世話になった杉本先生、中尾先生、鈴木先生、清水先生、都並先生、身の上相談まで楽しくさせていただいた金谷先生、新しいタイプの研修やプロジェクトを経験させてくださった野呂先生、年次総会でいつもお世話になった桶谷先生、谷原先生、そしてもちろん、三年間数々のプロジェクトにイベントに研修にお世話になった（まだ、もうちょっとありますね）アルバータの鶴沢先生、楊先生、サマレル先生、皆さん本当にありがとうございました。後任も六月二十日ごろには参ります。これからもよろしくお願ひ申し上げます。

日本語教育の世界は狭いのできっとまたどこかでお会いすると思います。どうぞお元気で。そして、カナダ日本語教育振興会のさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。

特別寄稿

「視聴覚」の授業とは何か

——チャナッカレ大学日本語教育学科の「視聴覚Ⅱ」の授業実践を通して——

広瀬 研也

1 はじめに

筆者は2003-2004年度後期（春学期）にチャナッカレ大学日本語教育学科（以下日教科）において2年生の視聴覚という授業を担当した。この授業はもと「会話」という名前であったのだが、日本政府のODAでLL教室が寄贈されることになり、その

LL教室を使った授業をする必要により名称が変更になった。名称は変更になったが2年生で他に会話という授業がないため、会話の授業としての性格も要求された。しかし本来視聴覚機材は「入力」作業に使われることが多く、会話、とくにそれが発話能力といった「出力」を思い描いている場合だが、そ

の能力を伸ばすためには非常に使いにくい。

2 視聴覚授業への要望

視聴覚機材を「使う」として学習者の「出力能力を伸ばす」としていった要望の他に、3年生の日本語教授法、4年生の教育実習の授業につながるような項目を取り入れ、加えて情報教育といった観点からの項目も取り入れるべきだという要望から、非常に欲張った授業になった。まとめると以下の4点となる。

A: LL 教室での視聴覚教材を使った授業であること

B: 「会話」授業の流れを引き継ぎ、会話能力を高める授業であること

C: 日本語教師としての能力開発につながる項目を取り入れること

D: 情報教育・メディア教育としての内容を含む授業であること

3 授業の目標

前項で述べた授業の要求を週に1回、2時間(1時間が45分のため実質は90分)の授業で、どのように扱うかについて考えた授業の具体的な目標は以下の3つである。ここでは、それぞれがどのように上述の様々な要求を満たすためのものだったかを述べたい。

(1) 「言葉」「文章」を分かりやすく説明する能力を身につける。

「言葉」の説明をさせると辞書の説明文をそのまま説明にしてしまう学習者が多かった。そのため同じクラスの学習者に説明をする場合でも、未習の語彙が使用され、未習語の説明の中でさらに未習語の説明をしなければならないという「説明のための説明」という現象がよくみられる。これが二重だけではなく三重、四重になる場合もあり、そうなると聞いている学習者は結局意味が分からないということがよくあった。

そこで「聞いている人が分かる説明をする」ように指導した。これは上述の授業への要求のB、Cに当たるものである。「分かりやすい説明」というこ

とで、会話能力というより発話能力と言えるかもしれないが、発話能力は、そのまま会話能力の一部を構成することも考えられるのでここに含めた。またCに対しては学習者に分かりやすく説明する練習という直接的な目的であると共に、聞いている人の日本語理解力を考える練習としても有効だと考えた。

(2) 言葉の定義を学習者に考えてもらう。

トルコ人学習者によく見られた会話のスタイルとして指摘できるものには、こちらが強くとすぐ引いてしまう、という姿勢がある。例えばレポートの内容について話をしている時に「どうしてこのように考えましたか」と理由を聞いた時に「これは間違いですか」と問い返され、さらにその後「先生が質問してくるからこの考え方はやめよう」と思ったのか、書き直しのレポートでは全く違う意見になってしまう。したがって「自分の意見には自信を持つこと。そのためにはどんな質問が出てでも答えられるように、予め質問を予想したりして準備をしておく」ように指導した。具体的には毎回授業の後で感想文の提出を求め、あまり考えずに書いたと思われる事柄に質問を書いて返した。その後、任意だがその質問の答えを書いて再提出した場合には1回につき1ポイントの加点をするようにした。

テーマは毎回授業内で見るビデオに関連しており、その点で授業への要求のAに、また意見を慎重に考え、ディスカッションにそなえるという点でBに、さらに予め相手の出方を予想するという点で、授業を計画する時に学習者の反応を予想することにつながり、その点でCに当てはまると考えた。またこのような言葉の定義や意見への質問の答えを考えることで、4年生に書く卒業論文のためにも役に立つと思われた。

(3) ビデオ作成を通して計画とそれを実行に移す場合のズレがどれほど大きいか感じてもらう。

最終的な課題として「差別」を説明するビデオを作製するように指示した。これも1つの言葉をできるだけ分かりやすく説明するという行為がBに、そ

の説明に言葉以外のものを用いてもよいという点でCに答えるものだと考えた。更に、計画では問題がなかったことが、いざ実施してみると問題が出てきてしまうことは、授業計画と実際の授業の関係でもあり、一定時間の撮影のためにその何倍もの準備時間が必要であることも、授業準備と実際の授業の関係に似ている。この点でCに答えていると考えた。

また、実際に作成したビデオをクラスで見て評価することが、授業の反省という点でCに、更に、自分達の考えとは違う見方をされてしまうことがあるという点で、Dに答えるものだと考えた。

4 授業のトピックと進め方

前項であげた3つの目標を実践するために、授業では一貫して「差別」をトピックとして取り上げた。比較的学习者の周囲にあり、かつ分かっているようで真剣に考え出すと難しいもの、日本語の視聴覚教材があること、などがその理由だ。差別の中でも主に性差別と外国人差別を考えさせること。女性に対する差別はトルコでも比較的良好に聞かれる現象であり、また外国人差別は彼らが日本人を含む外国人と対面した時に生じる可能性が高いと考えたためである。

また最初の2週間程度は機材の故障等で実施できなかったが、毎回授業の最初の15-20分はNHKの「週刊子どもニュース」の「世の中まとめて1週間」を見せ、希望の多いニュースに教師が解説をつけた。本学科の2年生の学習者はハズルルックと1年生、2年間の日本語学習を終了しており、普通の日常的な会話なら支障なく行うことができる者が多い。しかしながら、知り合った日本人との会話や手紙でのやり取りでは話題が広がらない、「日本人と何を話せばいいのか」という質問がよく出る。特に学習者よりも年齢が上（学習者の両親の年代であることも多いが）の日本人との共通のトピックを見つけ出すのに苦労しているようだったので、最新の日本のニュースを知ることが役立つと考えた。

5 評価方法

学習者の評価方法は以下のように行った。中間成績と期末成績の比率（4：6）は大学によって定められているものに従った。

最終成績 100 = 中間成績 40 + 期末成績 60

中間成績 100 = ビデオ企画書（シナリオつき）70 + ノート（授業毎に提出するもの）20 + 単語説明 10

期末成績 100 = 作品（ビデオ）40 + 自己採点（自分のグループのビデオを見て）20 + ノート 20 + 文章説明 20

6 授業の効果と問題点

(1) 「言葉」「文章」を分かりやすく説明する能力を身につける。

この点については実際の能力の改善までには至らなかったが、「辞書の丸写しでは分かりにくいので、工夫が必要だ」という意識の改善は達成できたと思われる。以前よりも同じクラスの学習者の説明を「理解」できる学習者が増えたこと、未習語彙があった場合に別な言い方で説明したり、説明の後に例文をいくつか言う等の工夫が見られた。しかしまだレベルを見極めるところまでは達しておらず、既習ではあるが難解な語彙を使う例も見られた。

(2) 言葉の定義を学習者に考えてもらう。

この点についてはできる学習者とできない学習者の差を広げる結果になった。毎時間後の感想文は内容が難しめになっているので、テーマを理解できる学習者は問題なかったが、それができないレベルの学習者は毎回のテーマにあった感想文を提出するのが精一杯で、教師の質問に答える余裕はなかったようだ。また、質問が面白い、有意義だと感じた学習者は積極的に答えたが、無意味だと思った学習者は答えなかったように感じた。

(3) ビデオ作成を通して頭上の計画とそれを実行に移す場合のズレがどれほど大きいか感じてもらう。

ビデオ作成後の自己採点の自由記述に「思ったとおりに出来なかった。」「もう一度やればうまくできる。」「初めてビデオカメラを使ったのでうまく作れなかった。」との報告があったので、達成されたと判

断した。また、ほとんどの学習者が、シナリオの書き直しや撮影時間の延長（夜中の11時過ぎまでかかったものもあった）を経験しており、頭の中で考えた映像と実際に撮れる映像の差の大きさを、実感したと考えられる。

7 まとめと今後の課題

前項で述べたように、3つの目標はある程度まで達成されたと考えられるが、やはり達成されないままのものも多かった。例えば、差別の中でもほとんどが外国人差別に終始してしまい、性差別に関しては、学習者の感想文や作成したビデオの中に見られる程度になってしまった。また、「差別」というのは何か、ということも結局授業の中では定義しきれずに終わった。更に、予定を消化できなかったことで事前に準備し学期前の休暇の課題としたものを授業で扱うことができなかった。

最後に、以上のことをまとめて「視聴覚」の授業

をどのように改善しなければならないかについて述べたい。LL教室の利用についてメディア教育・情報教育の観点からの語学教育を行うならば、それに関してメディア教育・情報教育の内容やソフトウェアをよく理解し、使える教員を担当とし、またその担当者の知識更新にも配慮されるべきである。

同時に「視聴覚」は会話の授業の一部という発想を、今一度検証してみる必要がある。音や映像があるから会話に役だつだろうというのはあまりにも短絡的な発想だが、「それでは、会話ではない視聴覚の授業とはどんな授業か」という質問に今の段階で筆者は明確に答えることはできない。「会話」「作文」といった技能別に考えるよりもそれらを総合したプロジェクト型の授業に、視聴覚の授業は適しているのではないか、という漠然とした思いはあるが、このことについても今後明らかにしていかなければならない。

連載

短歌に詠まれた日本語教育の現場・その四（全4回）

鷗沢 梢

いよいよ最終回になりました。今回は、「短歌に詠まれた日本語教育の現場」というタイトルからちよつとずれますが、日本語を外国語として学んだ方々の短歌をご紹介します。日本語で書かれたものや英語で書かれたものなどがありますが、まず日本語で書かれた短歌をご紹介します。（最初の計画では毎回、1首ずつ紹介するつもりだったのですが、今回は数首も紹介してしまったので、今回も1首以上ご紹介させていただきます。）

・アメリカに帰りたいけど独特のいぐさの香りあな
なたの香り

これはケビン・スタインさんという日本に住んでいるアメリカの方の作品です。ケビンさんにはお会いしたことはないのですが、私のホームページの中にある短歌のページを見て投稿してくれました。とても上手なのでびっくりしましたが、彼のホームページにはもっとたくさんの短歌が掲載されていました。

ところで皆さんは「ケータイ短歌」という言葉を聞いたことがありますか。現代の日本の若者達は携帯電話の画面で57577と短歌を作り、それをそのままNHKラジオの「土曜の夜はケータイ短歌」という番組に投稿して短歌を楽しんでいるということです。この番組で放送された短歌はインターネットでも読むことができるので、私は時々覗いているのですが、ここにケビンさんの短歌を発見してびっくりしたことがあります。選者の方も「外人なのに随分上手ですね、上手すぎるかもしれない」なんていうコメントを出していました。

外国語である日本語でこれほどの短歌が書けるなんて、信じられないくらいですね。「アメリカに帰りたいけど」のあとに「帰れない」という言葉が省略されているのですが31文字を守るために省略した、その手際に感心します。省略しても意味はちゃんと通じていますね。そして「いぐさの香りあなたの香り」という繰り返しがとてもいいリズム感を生んでいます。なかなかの相聞歌だと思いました。

ケビンさんは日本の若者に混じってケータイ短歌を楽しむという、最新流行の中に身を置いているわけです。このケータイ短歌の流行はアメリカのWall Street Journalにも取り上げられていました。この記事のコピーを送ってくれた友人はアメリカの若者もそのうちに日本のマネをしてケータイ短歌をするようになるだろうと書いてきましたが、そうなったら面白いですね。その場合は英語のタンカということになりますが、英語のタンカについては後述します。

- 空と地はたいへんとおくわかれても水平線であるのもある

上記の短歌はタイのスパワン・ソパチョットさんという方のものですが、日本歌人クラブが3年に1回開く国際短歌大会で賞を取ったものです。この国際短歌大会は世界各地で大会を開いているのです

が、去年は、タイのバンコックで開かれました。数年前にはカナダのバンクーバーでも開かれましたが、投稿してくる方々の中にはもちろん日本人も混じっていますから、日本人にひけをとらないで日本語で短歌を書くというのはとても大変なことだろうと思います。それでもこのソパチョットさんの歌は素直でありながらなにか哲学的で、よく書けていると思いました。私の好きな歌です。

それにしても、タイでも短歌が知られているとは、ちょっと驚きでした。カナダでは、ことにわたしの住んでいる西部地域ではタンカはほとんど知られていません。ハイク（俳句）は学校でも教えているようで、よく知られているのですが。こちらでは、“What is tanka? I know haiku.”とよく聞かれます。

オックスフォード英語辞典には「haiku」はちゃんと載っていますが、「tanka」はまだ載っていない、というのが現状です。

それで、私は短歌の良さをもっと世界の人々に知ってもらおうとモンリオール在住のカナダ人の友人（タンカのメル友）と協力してタンカカナダという団体を立ち上げ、年に2回、「GUSTS」という英語のタンカジャーナルを発行することになりました。これはカナダで初めて発行された英語の短歌ジャーナルです。第1号、第2号は2005年にすでに出ており第3号が2006年5月に出る予定です。第1号も第2号も評判はとてもよくて、ほっとしました。レスブリッジ・ヘラルドという、こちらの新聞にも写真入りで大きく紹介され大変気を良くしています。

しかし、共同編集をしていたこの友人は急に都合が悪くなり、3号からは私一人で編集業務を行っています。彼女は編集業務を本職にされており、ハイクもタンカも作るという器用な方です。メールだけでやりとりをして、まだお目にかかったことはないのですが、何の障害もなく2人でジャーナル編集、発行の業務を行ってきました。一人になっても、この友人のおかげで、すでに敷かれているルールがあ

りますので、編集業務は楽です。

それで、このジャーナルは英語圏の読者に向けているため、会員は今のところカナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリスと英語圏の国が主流を占めていますが、オーストリア、フランス、日本など、英語圏以外の国からも投稿が来ています。会員数はすでに100名以上になりました。投稿者／読者は日本語を習った人もいますが、日本語はできなくても、日本文化や日本文学に興味を持っている人が多数を占めていると思います。西行とか子規とか茂吉とかの名前がメールでのやりとりの中に出てくるのでびっくりしました。皆様も英語でタンカを作ってみませんか。面白いですよ。

それでは、次に英語タンカをご紹介しますと思います。

staring at the rain
from a plush plum arm-chair
at Starbucks
I wish my son were here
complaining of the coffee

この英語タンカはアメリカ・フィールデンさんというオーストラリア在住の方のものです。アメリカさんのことは、すでに二回目のエッセイで私の共同翻訳者としてご紹介致しましたが、短歌翻訳以外にもご自身でタンカを作られています。アメリカさんは日本語を勉強され、日本にも留学された方ですが、やはり日本語で短歌を書くというのは難しいようですね。これは、前述した英語タンカジャーナル「GUSTS」の第1号に載ったものです。「Starbucks」というアメリカのだコーヒー屋さんが日本やカナ

ダばかりでなくオーストラリアにまで浸透しているのを知って、ちょっと驚きましたが、この歌は最後の「complaining of the coffee」というのが、とてもユーモラスで、思わずくすりと笑ってしまいました。

以上、日本語を外国語として学んだ方々の短歌を御紹介しましたが、いかがでしたか。短歌はまだまだ外国では知られていません。それで私は日本の現代短歌を海外の人々にもっと知ってもらおうと思って、短歌の英訳をしているというのを第二回目のエッセイで書きましたが、この5月にボストンにある Cheng & Tsui という出版社から出版されます。これは英和対訳になっており、大学で日本文学を教えられる先生方にもお使いいただけるのではないかと思います。かの有名な俵万智をはじめ、佐佐木幸綱、伊藤一彦、河野裕子、馬場あき子のような第一線で活躍されている歌人、故人となられても人気のある寺山修司、大西民子、永井陽子、また海外でもかなりよく知られるようになってきた与謝野晶子、正岡子規、石川啄木、斎藤茂吉、そして名前は良く知られていなくてもいい作品を書かれておられる歌人等、いろいろな歌人の代表歌を英訳しました。この本が短歌の良さを海外でも知って貰える一助になれば、と思っております。

これで4回にわたり連載してきました私のエッセイを終りにしたいと思います。読者の皆様、お付き合い下さいましてありがとうございます。

(uzawa@uleth.ca)

日本事情・・運動会？水泳？

王 伸子

学習者である留学生が日本に来て出会う数々のことの中には、学生が驚くこともあります。私たちが聞いてびっくりすることも少なくありません。「日本に来て驚いたこと」というテーマで作文を書いてもらったり、四方山話の中で学生からいろいろと聞いたりすることがあります。今回は、そんな話題の中からスポーツに関することをご紹介しますと思います。単なる話題に終わらせず、学習者が日本語による談話の中で理解できない話の背景、「スキーマ」にもなる内容と思われれます。

その一。「運動会」

大学生にもなると、なかなか学校をあげての「運動会」は行われなと思います。専修大学では数年前まで、世田谷区の区立運動場というグラウンドを借り、1日ばかりで運動会を実施していました。その日は全授業が休講となり、学生委員が主導してあらかじめエントリーしていたチームや個人が参加します。もちろん、リクリエーション色が強いので、借り物競争だとか綱引きといった楽しい種目(?)が中心でしたが、大運動会でした。

あるときその運動会を前に、留学生もチームを組んで出たらどうかと水を向けたところ、

「運動会って、だれでも出られるんですか?!」とびっくりする留学生たち。学内の人じゃなければ出られないけれどもと言うと、そういう意味ではなく、何か記録を持っていなくてもよいのか、ということなのでした。もちろん、大学の運動会は楽しむことのためにあり、記録を持っている学生は本格的なインカレに出たり、中にはオリンピックの強化選手になる者もいます。(専修大学はウインタースポーツに強く、北海道や長野県出身の学生がスキー、スケート等で活躍しています)しかし、運動会はあ

くまでも運動会。すると中国出身の学生たちが、

「中国では、運動会はすべてが競争なので、小学校のころから、選ばれた者だけが出る行事。とくに人口の多い上海など都会の学校では、一部の学生しか出ることにはできません」とのこと。クラスの留学生たちに聞くと、今まで一度も競技に出たことがないという学生がたくさんいました。日本では、もちろん全員参加で、家族総出で見に来る学校行事であり、玉入れ、綱引き、大玉送りなど、個人競技ではないプログラムがたくさんあるという説明をすると、学生の方が驚いたようでした。

選ばれなかった者はひたすら応援するそうで、中には、運動はだめだけれども漢詩の朗読が得意だという生徒が、昼食の休憩時に全校生徒の前で漢詩の朗読を披露するというプログラムを行なう学校もあるようです。また、家族が総出で見に来るという行事でもないそうです。学生曰く、「中国では基本的に個人の競技が中心です。もし、玉入れとか綱引きがあったとしても、予選で玉をたくさん入れられる人が選ばれるとか、そういうことになると思いますよ。まあ、あり得ない競技ですが」

ですから、秋の運動会と言っても、そうした背景を持つ学生たちは日本の運動会のことはよく分らないので、その話題をめぐって話が食い違ってくるが出てきます。もっとも、国によってこの状況は異なると思いますが、韓国の学生の話では、日本とほぼ同様の状況のようでした。日本語学校の中には大々的に運動会をおこなう学校もあり、留学生たちが楽しい一日を過ごせるよう配慮してくださるところもあるようです。

そういえば、息子がカナダの小学校に通っていた時も、「〇日はスポーツデーだから、青いシャツを

着てくるように。青チームなので」と、ある日、突然、メモを持って帰ってきた記憶があります。親がとくに見に来るものではない、とはいうものの、興味があったので見学に行ってきました。すると、青いシャツを着た子ばかりの集団がわいわい跳ね回っていて、その向こうには赤いシャツの子、そして別の場所には黄色のシャツ・・・ようするに、同じ色のチームの子どもたちに先生がそれぞれ付き添い、飛び回ったり運動をしたりして遊び、ときどきそのチームの場所を交替してプレイグラウンドのあちこちでいっぺんに運動をする、そういう日だったようです。

もちろん、学校によって違うかとも思いますが、みなさんのお子さんはいかがでしたか。これもまた、日本の運動会とはまったく異なる行事ですね。そうそう、パジャマデーとかぬいぐるみデーなどもありました・・・。

その二。「水泳」

中国や韓国の留学生がみんな驚くこと、それは「水泳」です。日本人の学生がほぼ全員泳げる、ということに様に驚きます。大学の必修科目に「体育演習」という科目があり、テニス、卓球、水泳、スキー、ゴルフなどの種目の中から一つ選んで履修します。スキーは2月に2週間近く合宿して集中的に行ないます。留学生、とくに中国の学生は泳げないことが多く、泳ぎを習いたいと水泳を選択するようですが、プールに入ってびっくり！それは、日本人の学生がみんな、25メートルをどんどん泳ぐからなのです。

ある留学生の話によると、自分も多少泳げるつもりでいたけれど、最初に25メートル泳がされた時、みんなが泳ぎ終わったのに、自分だけはなかなかバ

タバタして進まず、へとへとになって泳ぎきったということです。日本語学校や専門学校で過ごした学生も、さすがにプールの授業はなかったため、大学に入ってから初めて経験することとして、毎年、今頃の季節になると、学生からこの話が出ます。

現在、東京では、公立の小学校にはほとんどプールが設置されており、6月に入ると水泳の授業が始まります。屋上にプールを設置している学校も多いようです。夏休みも学年別に時間が決まっています。水泳の指導があり、それぞれ泳げる種目と速さによって級をもらいます。そもそも、ほとんどの子どもが小さい時にスイミングクラブに通うので、小学校入学時には泳げるようになっています。カナダの子どもがスケートをしたりホッケーをしたりする状況と似ていると思います。

今年入学した留学生には、この体育演習はなかなか人気があるようで、普段の講義中心の授業では、日本人の学生と親しくなる機会が残念なことにあまりないのだけれど、体育演習の授業では、一つの競技に取り組むという連帯感からか、友達になれることが多いと喜んでいきます。なるほど、そういう効果もあるのかと、再認識しました。体育の授業は学部の正規留学生しか履修できない授業ですので、留学生たちが積極的に参加し、ストレス解消や学生同士の交流に生かしてくれることを願っています。運動を通して見るその国の事情というものも、肌で学んでほしいところです。

日本の学校行事の中での「運動会」や、「水泳授業」も、授業の素材として生かしてみたいかがでしようか。海外で日本語を教える先生方にも、日本国内で日本語教育に従事する先生方にも利用できる内容として提案したいテーマです。

活動報告とこれからの活動案内

ジャーナル CAJLE 第8号

今年度は6本の投稿論文の内3本が掲載採用となった。また、採用されなかった論文の内1本が、既に他で出版されている論文と判明。編集委員会としては、今後、このようなことが再びおこらないよう厳重に喚起したい。今年度の査読委員は、牧野成一先生（プリンストン大学）、曾我松男先生（名古屋外国語大学）、川口義一先生（早稲田大学）、上野善道先生（東京大学）、野呂博子先生（ビクトリア大学）の5名。8月の年次大会で会員参加者に配付の予定。
(桶谷仁美)

2006年年度大会準備経過報告

2005年10月にトロント在住メンバー6名からなる大会準備・実行委員会を発足した（副委員長 杉本陽子）。ミーティングや電子メール、電話により協議を重ね、会場（国際交流基金トロント文化センター）、実施期間（8月25日～28日）、テーマ（日本語教育と生きた日本語）などを決定した。また、トロント新移住者協会日本語プロジェクトに協賛いただくことになった。昨年12月に国際交流基金への助成金申請を行い、それに対し5月に助成金交付の通知、同時に2名の講師（有馬淳一氏、室屋春光氏）派遣の知らせを受けた。4月に東京大学の上野善道氏が講師に、その後、ヨーク大学の太田徳夫氏が基調講演に決定した。現在、講師の方々と講義・講演内容などについて電子メールで連絡をとっている。研究論文発表は、昨年12月に公募を出し、4月31日に締切となった。今年は44名の応募があり、審査の結果、26名が採用となった。発表者はカナダ、日本、アメリカから参加する。現在は、研究発表プログラムを含む大会プログラムの最終調整を行うとともに、懇親会や日帰り旅行の計画を進めている。本号の「これからの活動案内」にさらに詳しい大会情報を記載し

ている。大会案内は6月中旬に発送し、同時にホームページにも掲載する予定である。

(CAJLE2006 大会委員長 谷原公男)

第2回理事会決議事項及び理事移動

項目1、金谷武洋氏、野呂博子氏の辞任届けは、1月22日を以て承諾受理された。(jan22.2006-1)

項目2、理事の欠員補充について、理事全員の賛同を得て竹井明美氏が就任した。(feb03.2006-2)

項目3、ニュースレター、ジャーナルそれぞれの担当者変更等について、決議案1で、大江都氏が谷原公男氏を引き継ぎ、ジャーナルの日本語校正主任に決定した。(mar29.2006-3-1)

決議案2で、西島美智子氏はニュースレターを辞任され、ホームページ担当となることが承認された。

(mar29.2006-3-2)

(清水道子)

オンタリオ部会活動報告

昨年度に引き続き新移住者協会日本語プロジェクトと提携協力し合って(1)継承日本語教育の啓蒙、(2)日本語教師研修、(3)調査プロジェクトと大きく分け3項目の活動を実施した。

(1)継承日本語教育の啓蒙

①学校説明会

2005年12月18日午後、日系文化会館商工会コートにて開催したファミリー(旧ベビー)・トークス・フォーラム年末親睦会プログラムの一部とし、地元の幼稚園、日本語学校計8組織代表者の説明があり、質疑応答の後、引き続き各テーブル毎に更に詳しい個別説明がなされた。親睦会には親子合わせて240人余の参加者があり、若い保護者の皆さんが熱心に説明を受けていた。当部会としては、代表者説明時間の管理や会場における子どもたちの安全管理などを協力した。

②継承日本語教育勉強会

昨年に引き続き、2006年4月9日(日)午後1時-4時、トロント日系文化会館のAJCコートにて、CAJLEとNAJC日本語プロジェクト共催で鈴木美知子氏を講師に迎え、テーマを「家庭における子どもの読み書き能力育て-日本語学校の学習を効果的にサポートする方法をさぐる-」とし、ワークショップを中心に、子どもと共に楽しみながらできる家庭における読み(文字の認識~読解)、書き(仮名・漢字の書き~作文)能力育てについての勉強会を実施した。

参加者50名のそれぞれが真剣にワークショップに取り組み、アンケートにも勉強させられる子どもの立場を体験し、気付かされることが多々あったなどと詳しく回答したものが多く、勉強会に対する熱意や期待、要望などが多く寄せられた。

③新移住者協会創立30周年記念座談会

新移住者協会主催にて2006年5月28日(日)、午後1時半-4時、トロント日系文化会館のAJCコートにて協会加盟日本語学校3校の卒業生6名とその保護者6名、教師5名を迎え、トロントにおける継承日本語教育の歩んで来た30年の道程を振り返り、その実績から学び、来聴者との意見交流を通して継承日本語教育の将来を展望する企画として実施された。

来聴者14名と少数ではあったが活発な質問や意見が出され、興味深い有意義な座談会であった。追って新移住者協会創立30周年記念誌に収録される予定である。

CAJLE部会としては、司会及び受け付けを協力した。

(2)日本語教師研修

新移住者協会日本語プロジェクトと協力し合い、2回の活動を実施した。

①教室で直ぐに役立つ文法講座

2005年11月6日(日)午後1時-4時、トロント日系文化会館のAJCコートにて、CAJLE主催により、昨年に引き続き谷原公男氏を再び講師に迎え「初級

から中級へ伸びる文法とその教え方」と題する文法講座を開催した。

講義内容を大きく二つに分け、まず「初級で必ず押さえておきたいこと」として動詞の分類と基本的な活用、い・な形容詞と名詞、助詞、文型・構文の基本など6項目、次いで「中上級で伸びるための文法」として中級の初めに押さえておきたいこと、名詞修飾と日本語の語順、待遇表現、話体と文体などの項目を質問や課題で参加者を巻き込みつつ丁寧に解き明かし、「分かりやすい講座で大変参考になった」という感想をはじめ、実際に役立つ内容で、すぐにも実践してみようと言う意欲の感じられる多くのアンケートが寄せられた充実した勉強会だった。参加者24名

②日本語文法講座

2006年3月19日(日)午前10:30-午後2:00、トロント日系文化会館のAJCコートにて、新移住者協会主催、CAJLE協力でここ数年恒例となっている金谷武洋博士を講師に迎え「包んで癒す言葉・切って裁く言葉」と題し、5回目の文法講座を開催した。

いつもながらの「えっ」とおもわず引き付けられるテーマで、日本語教師として心得ておきたい日本人の精神構造や日本文化との関わりの中で形成された日本語について、たくさんの参考資料を引用しつつ、要所要所で『日本語はSense of wonder、「過分の恩」「恩寵の(虫の)V言語」、「現代英語などの多くの西洋語は裁き、比べ、揃え、切る(神の)SVO言語』などと西洋語と対比させたりしつつ説き、ちょうど、昨年11月の谷原氏による「教室で直ぐに役立つ文法講座」と表裏をなす内容であり、参加者は軽妙な話術に引き込まれつつ、あっという間に過ぎた勉強会だった。参加者36名。

(鈴木美知子)

(3)調査プロジェクト

2005年11月6日(日)午前10:00より、トロント日系文化会館、AJCコートにて、CAJLE主催による「プラーチャレンジ説明会」が開催された。プラー

チャレンジに関する簡単な説明の後、オンタリオ州立高校の School Guidance Counselor として現在活躍され、プラーチャレンジの審査を担当された高田達氏を講師に、約 1 時間にわたり 4 技能のテストに関するアセスメントとエヴァリュエーションに焦点を当て、多くのテストケースを提示しながら説明会がなされた。その後質疑応答に入り、参加者の多くの活発な意見が交わされた。参加者 22 名。

2006 年 2 月 9 日 (木) 午後 6:30 より Earl Haig Secondary School にてトロント教育委員会主催のプラーチャレンジ説明会が、昨年より 1 週間早く行われた。今年は会場も広く、200 人を越える保護者同伴の学生及び聴講者が出席した。振興会会員及び関係者 5 名が参加し聴講した。今年は、この説明会のあと、デースクールに通学し、私立の日本語学校に通う 2 名の学生が登録した後、デースクールのガイダンスオフィスに登録用紙を提出してプラーチャレンジに申し込んだ。現在手続き中である。

2006 年 3 月 19 日午後、トロント日系文化会館の AJC コートで新移住者協会主催、CAJLE 協力による金谷武洋博士の日本語文法講座で、「プラーチャレンジ説明会のその後の経過報告」を 10 分程いただいて教育委員会でのオリエンテーションの内容を簡単に説明した。

特記事項として、申し込み希望者は、デースクールが附属する教育委員会でのプラーチャレンジの説明会に出席して、名前を登録する。他市の教育委員会では受け付けない。各市の教育委員会によっては、

申し込み数が少なく、又その他の理由で特に説明会及び登録の受付が行われない場合は、デースクールガイダンスオフィスに行き、直接係りと相談し手続きをすることができる。他市の教育委員会での説明会に出席することは可能であるが名前を登録することはできない。プラーチャレンジに関するお問い合わせ：清水道子、416-695-8153

Email: homi.shim@3web.net

(清水道子)

今後の活動予定

2006-07 年度に対する具体的な活動予定はこれから検討してゆく段階であるが、次年度も新移住者教会と提携しつつ、できる範囲で活動を続ける予定である。

これからの活動案内

◇2006 年度年次大会

2006 年度年次大会は、8 月 25 日 (金) より 28 日 (月) まで国際交流基金トロント日本文化センターを会場に開催いたします。(詳しくは、本号の 2006 年度年次大会準備経過報告及び大会情報他ホームページ等をご参照ください。)

◇年次総会

年次大会 1 日目、8 月 25 日 (金) 午後 5:00-6:00、国際交流基金トロント日本文化センターにて年次総会を予定しております。今年も理事改選も行います。多数のご参加をお待ちしています。詳細は、「年次総会ご案内」をご参照ください。

書記 清水道子・鈴木美知子

BULLETIN BOARD

カナダでは、5月に大学の Convocation も終わり、長い夏休みが始まったこの季節、それぞれに休暇や帰省など、少しゆっくりした時をお過ごしのことと思います。日本の会員のみなさまは、逆に新学期も軌道に乗り、夏休みを目前にした前期最後の追い込みの忙しい時期を過ごしていらっしゃるでしょう。新しい形でニュースレターもお届けするようになり、CAJLE もこれからの新しい風を吹き込もうと、夏の大会に向けて大会準備委員がフル回転で動いています。今回、特筆すべきことは、基調講演にトロントのヨーク大学より、太田徳夫先生にお越しいただき、お話をうかがえることになったということです。たいへんお忙しい中ご準備くださり、お話しくださいます。また、研究会講師として、日本言語学会会長でもある東京大学の上野善道先生にお越しいただきます。どうぞ、今から日程を確認し、是非ともご参加ください。研究発表も、今年は予想を上回る数の応募があり、慎重なる選考の結果、応募総数の約6割の方に発表していただくことになりました。大会が、年を追うごとにさらに充実し、会員の皆さまにとっても実り多きものとなりますよう、準備に専心してまいります。

8月末、トロントで一人でも多くの方と、またお会いできることを楽しみにしております。

会長：王 伸子

《会 員 規 定》

カナダ日本語教育振興会は、カナダにおける日本語教育の発展と向上を目指す非営利組織です。日本語教育に関心のある方ならどなたでも会員として登録することができます。

会費年度：2005年6月～2006年5月

年会費： 連絡先がカナダの場合…CAD\$40.00、アメリカ及び南アメリカの場合…US\$40.00

上記以外の場合…US\$60.00（いずれも郵送の場合は小切手または money order で）

申込必要事項： 氏名（日本語およびローマ字）、現住所、電話およびファックス（自宅、職場の両方）、電子メールアドレス、所属機関。

申込先： Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE)

P.O. Box 75133, 20 Bloor St. East, Toronto, Ontario, M4W 1A0, CANADA

お問い合わせ： Tel: 416-516-8146 E-mail: suzu@eol.ca (鈴木)

Tel/Fax: 416-285-9217 E-mail: tonami@rogers.com (渡並)

(入会申込書は、ホームページをご覧ください。 <http://www.cajle.org>)

カナダ日本語教育振興会 (CAJLE)

ニュースレター・32号 発行日：2006年6月22日

編集：CAJLE Newsletter 編集部 Copyright: CAJLE (2006)

編集部便り

★ 私が初めて CAJLE の大会に参加したのは 6 年前でした。カルガリーからの参加者は私だけだったので、チョッピリ不安でした。大会初日の朝、トロントの地下鉄に乗って見たかったので駅に行ったら警察官が何人もいて、やっぱり大都会は恐ろしいと思いながらハンドバッグを両手で抱えて電車に乗りました。駅で飛び込み自殺があったと知ったのはその日の晩でした。電車をおいたら回りはビルだらけ。CN タワーで位置を確認しながら、やっと会場にたどり着いた時にはクタクタになっていました。でも、そこで待っていたのは理事の方の温かい笑顔でした。それから 3 日間は昼は研究論文発表と教師研修、夜はおアソビで、小さな町の日本語教師の私には大変いい刺激剤になりました。それからは、毎年夏になるとエネルギー供給のために大会に出るようになりました。NL を読んでいて、今回理事をお辞めになることになった金谷さんと鈴木さんと中尾さんの優しい笑顔が目に見えられました。金谷さん、鈴木さん、中尾さん、長い間の理事のお仕事、ありがとうございました。これからも、ずっと私たちの指導者、相談役でいてくださいね。(サマレル)

★ 今号ニュースレターの発行が大幅に遅れてしまい、大変申し訳ございません。期日通りに原稿を送っていただきました執筆者の方々には、大変申し訳なく思っております。言い訳になってしまいますが、今回の編集作業ほど大変なことはありませんでした。ね、編集長！ 実は、CAJLE 事務所が移転しなければならなくなったのです。長年借りていた事務所のある建物が、急に売りに出されてしまい、しかもすぐに買い手が見付かるという不幸な事態も起こりました。早急に移転先を見つけたら 19 年間の埋蔵品を処理、処分したりという事態に追い込まれました。連日先頭を切って整理にあたってくださったのは、書記の鈴木、清水両氏、会計の渡並、中尾両氏です。私はトロント事務局の一員とは言え、仕事と年次大会の準備と言う大義名分を振りかざして、大した労働力にはなっていません。6 月 27 日には引越し屋さんに頼んで引越しを敢行しますが、移転先は倉庫です。今までの家賃では、事務所を借りることは無理だと言うことが分かり、こうするより仕方ありませんでした。ですから皆さま、会費納入の際は新住所をお確かめの上ご送付ください。新住所はこのニュースレターの会員規定に記されています。そんなこんなで引越し準備とニュースレター編集時期が重なってしまい、大切な会の活動報告等の記事を担当する書記さんは、書記である前に引越し人足としての任務に追われる毎日が続きました(今も続いています)。体力的にも精神的にも限界のところまで仕上げてください活動報告です、ぜひ念を入れてお読みください。(杉本)

★ 普段とは違って変わって、学生も教官もほとんど通って来ない静かな大学のキャンパスにいて、随分と出遅れるニュースレターの最後の編集に取り掛かっています。時はまさにワールドカップ、しかも日本-ブラジル戦はすぐそこまで迫ってきています。もともとこのニュースレターが皆様の手元に届けられるころ、そういうことがあったつくと、とっくに記憶の奥に押し込まれる出来事になってしまうことは、目に見えています。思えば、ここまでやってくるまでには、どれだけ騒いだことでしょうか。選手たちは苦戦苦闘し、観客観衆はマスコミに煽られて否応なしに期待を高めていきます。カナダにいて、ほとんど唯一つの日本との繋がりと言え、NHK の夜のニュースも、外国には放送できないサッカーの内容があるだろうという理由で、数時間もずらして録画放送に切り替え、しかも放送時間を半分も縮めるといった寝耳に水の予告が出されてしまう。それらのすべては、やがて起こってくる決勝トーナメント進出失敗という結果とともに、あっという間に忘れ去られてしまうことだろう。いまやスポーツとはまざショービジネスである以上、そのような運命を伴うものだと言ってしまうえばその通りですが、ここに時間と物事の縮図を見た思いです。ニュースレターのレイアウトをいじりながら。

そのニュースレターですが、今号からは、一部の機関など以外、会員には初めて電子ファイルでの配布となりました。従来通りのハードコピーで読みたいという方がおられれば、郵送の依頼も受けつけます。ご希望の方は、どうぞ渡並さん宛てにお申し込みください。最後に、繰り返しますが、いろいろな理由で今号の発行は大きく遅れ、学期末などたいへん忙しい時期にお約束通りに原稿を寄せていただいた執筆者に改めてお礼とお詫びを申し上げます。(楊)